

# 研究部だより

NO. 2

市原の史跡紹介 編

## ○はじめに

昔、東大寺大仏殿（奈良県）から正倉院を見に行こうとしたときに、広い芝生の敷地に整然と石が並んでいる場所がありました。その場所の正体は何か？その疑問をとく鍵が、市原市にありました。



## ○「なぜ、市原市？」

石は礎石（そせき）といって、建築物の基礎となり柱を支える石のことです。現存する世界最古の木造建築である法隆寺金堂にも礎石が使われています。その当時、市原市に建てられていた国分寺も礎石を使って建てられていました。なお、国分寺は聖武天皇が仏教による国家鎮護のため当時の日本各地に建立を命じたもので、千葉では市原市に国分寺、国分尼寺、七十塔が、礎石による礎石建築で建てられました。



## ○「石の上に柱が立つの？」

礎石の上に柱を立てるといっても、そもそも凹凸のある石の表面に木の柱が立つのでしょうか？その答えが上総国分尼寺跡展示館にありました。その技法は「ひかり付け」といい、礎石の凹凸に合わせて柱の接合部分を削って合わせる方法で、石の表面に赤い粉をかけ柱を乗せ、赤い粉が付いて凹凸が合わない所を削って調整するという作業を、何度も繰り返し石と木材の表面が合うように仕上げたようです。



写真引用「史跡上総国分尼寺復元

回廊ができるまで」

## ○「柱の表面に模様がついているのは何？」

復元された国分尼寺の柱の表面をさわってみると凹凸があるのがわかります。これは表面を「やりがんな」という道具でけずり仕上げた跡です。私たちが知っている道具は「台かんな」ですが、使われ始めたのは室町中期のようです。それ以前は「やりがんな」が使用されており、国分尼寺の復元では「やりがんな」自体を復元して使用しています。

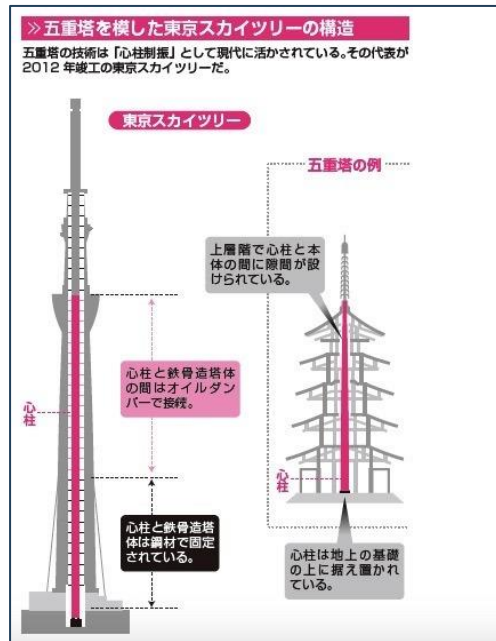


← やりがんな（復元）

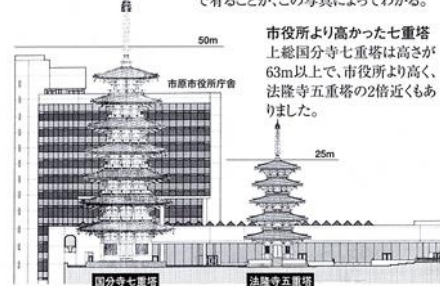
上総国分尼寺跡展示館



## ○「塔は倒れないの？」



大正13年の七重塔心礎  
心礎は直径1.8m、厚さ0.7m截頭円錐形で有ることが、この写真によってわかる。



この時代の塔の建て方として、心柱という柱を礎石のうえに立て、その柱を中心に、周りに屋根を配置していきます。屋根と心柱はあえて固定せず、地震や強風のときは心柱が独立して振動することで建物全体の揺れを打ち消し合うことで揺れを軽減します。これは、東京スカイツリーにも採用されている技術です。ちなみに市原市で建てられた七十塔は市原市の市役所より高かったようです。

右図 引用：上総国分尼寺跡展示館 「上総国分寺跡のリーフレット」より

<https://www.city.ichihara.chiba.jp/article?articleId=60236e9eece4651c88c17b6d>

左図 引用：毎日が発見ネット <https://mainichigahakken.net/life/article/post-23.php>

## ○おわりに

今回紹介した上総国分尼寺跡展示館は市原市役所の近くにあります。この展示館は出張の帰りたまたま見つけた場所で、自分自身の疑問がふとしたきっかけでわかったのでとても印象に残っています。当時の方法で復元された国分尼寺の建物はとても立派で、展示館には建物を復元するに当たっての記録も残されています（市原市webでも公開）。もし、修学旅行等で東大寺大仏殿などを見学する機会がありましたら、この話題に触れ、事前学習で生徒が調べ学習をしてくれると深い理解につながります（問いの授業）。奈良から千葉までは遠く離れていますが、仏教の普及と併せて当時の最先端の建築技法が伝わることはとても興味深いです。

